

斎藤末弘著

作品論 椎名麟三

桜
楓
社

斎 藤 末 弘 (さいとう すえひろ)

昭和11年 5月 北海道に生まれる。

昭和34年 3月 国学院大学文学部国文科 (日本文学専攻)
卒業。

昭和35年 3月～48年 3月 椎名麟三・佐古純一郎・阿部光
子・高堂要らとプロテスタント文学集団
“たねの会” 研究グループに参加。著書に
『太宰治と 椎 名 麟 三』(緑地社), 『太宰
治論序説』(桜楓社)がある。

現 在 西南学院大学文学部教授。

現住所 福岡県糸島郡前原町高田257-13

印 検
略 省

作品論 椎名麟三

平成元年三月二十日 初版印刷
平成元年三月二十五日 初版発行

定価四八〇〇円

著 者 斎 藤 末 弘

発 行 者 坂 倉 良 一

印 刷 所 朝日精版印刷(株)

東京都千代田区猿樂町一―三―一

(株) 桜 楓 社

電話 (〇三) 二九五―八七七―
振替 東京六一八〇二〇

作品論

椎名麟三

目次

第一章 「深夜の酒宴」論——その成立と主題について——……………7

一、成立事情 7

二、「黒い運河」と「深夜の酒宴」 12

三、「深夜の酒宴」 17

1 絶望の状況／2 主人公の位置／3 主人公と叔父仙三／4 主人公と加代

結び 31

第二章 「永遠なる序章」(一)——その成立と「悪霊」の影響をめぐって——……………35

一、成立について 35

二、ドストエフスキ「悪霊」の影響——マリヤの二人称と「安太（あんた）」の関係——……………49

第三章 「永遠なる序章」(二)——成立補遺及び同時代評をめぐって——……………59

一、成立補遺 59

二、同時代評——新聞時評を中心に——……………61

1 成立前後の椎名文学評価／2 「永遠なる序章」同時代評（a 肯定的時評、b 批判的時評）

第四章 「赤い孤独者」論(一)——その時代とモデル・執筆経緯を中心に——……………80

一、モデルとその時代 80

[a]荒本守也／[b]田中英光／[c]菅季治

二、執筆経緯 88

第五章

「赤い孤独者」論(二)——成立補遺・作品分析・同時代評をめぐって——…………… 97

一、成立補遺 97

1 「創作草案ファイル」／2 アウイニヨンの「ビエタ」／3 はるかなモデル——赤岩栄

二、作品分析 102

1 モチーフについて ([a]内在的モチーフ——庶民の「復讐への情熱」、[b]外在的モチーフ——エックス・コムミニスト)

／2 小説の方法 ([a]アヴァンギャルド芸術論の影響、[b]意識と存在との関係) ／3 重夫の関係する現実 (伝一・英子・榎本老人) ([a]長島伝一と重夫 革命政治 (組織・量) 的現実、[b]英子と重夫 姦淫 (個人・質) 的現実、[c]榎本老人と重夫——キリスト教 ([b] + 個人・質) 的現実) ／4 佐藤四郎と長島重夫——「意識と存在」 ([a]佐藤四郎——「反省する自分」 「見る自分」、[b]長島重夫——「反省される自分」 「見られる自分」) ／おわりに

三、作品評価——同時代評から研究へ 122

[a]肯定的批評／[b]批判的批評

第六章

「邂逅」論(上)——その成立をめぐって——…………… 128

一、「邂逅」の意味 128

二、受洗と復活経験の確定 129

三、ユーモア論の形成 135

四、創作ノート断片 138

五、「赤い孤独者」と「邂逅」の間 143

六、初出誌「群像」と「単行本」の大幅改稿 146

第七章 「邂逅」論(下)——作品分析・同時代評——

一、モチーフについて 153

[a]個人的モチーフ／[b]社会的モチーフ

二、テーマについて 156

[a]古里安志と他の人物関係 (ア)石田確次(日本共産党員)——相対的自由の絶対化、(イ)野原実子(無神論〈神への反抗〉
の実存主義)——ナンセンス・虚無(行動的デカダンス)／[b]古里安志(クリスチャン)——ユーモアの闘い (ア)姓名の
由来、(イ)終末的狀況設定、(ウ)安志の立場、(エ)自己相対化から他人相対化へ、(オ)残酷な微笑、(カ)死の相対化、(キ)拒絶と同
意／終わりに

三、作品評価——同時代評を中心に 176

[a]肯定的批評／[b]批判的批評／[c]四十年代以降の批評・研究

第八章 「美しい女」論(一)

はじめに 186

一、成立事情 188

二、モチーフ 193

三、テーマ—主人公と三人の女 196

1 売春婦・倉林きみ（反社会的自由）／2 出札係・木村（旧姓飯塚）克枝（社会的自由）／3 同僚の妻・ひろ子（反社会的・社会的自由から切り離された自由）／4 三人の女の共通性

四、主人公（木村末男）の自由 204

五、小説の方法 210

第九章 「美しい女」論（二）——成立補遺及び同時代評をめぐって……………213

一、成立補遺 213

二、同時代評 215

1 成立前後の批判／2 「美しい女」同時代評（a.肯定的時評／b.批判的時評）

第十章 「美しい女」の木村の源流——ムイシキンとドン・キホーテの流れを中心に……………227

一、木村末男の源流 227

二、「ドン・キホーテ」的人間像の系譜 231

初出一覧……………237

あとがき……………239

第一章 「深夜の酒宴」論

——その成立と主題について——

一、成立事情

昭和二十年九月、終戦を迎えるや否や東京世田谷にいた椎名麟三は、新潟県岩船郡館腰村小川に疎開していた友人船山馨を訪ねている。よれよれの古背広にゲートル、戦闘帽、鮫皮のぼろ靴、わずかばかりの米を入れたズックの鞆を肩から下げた瘦身の椎名が、何故東京から不自由な列車を乗り継いで船山を訪ねたか。その目的は二つあった。一つは生活の手段として、貸本屋兼孔版印刷所を経営することであり、二つめは「存在主義文学」運動を展開するため自分たちの書下ろし叢書を出すということであった。その時椎名は船山に次のように語った。

「人間の存在そのものに問いかける仕事をしよう。その性格を明確に打出す意味で存在主義文学という旗旗を鮮明にする。運動の手始めに書下し叢書を出そうと、彼は肉の落ちた顔の中でそこばかりが拡大したように見える両眼に、熱っぽい光を溜めて喋った。」（「明日も夜から」船山馨 昭44・9月号「別冊文芸春秋」）

こうして船山の協力をとりつけて、椎名は東京の京王線烏山駅前（東京都世田谷区千歳烏山町六四〇番地）に木造平家の家を借りて「創美社」（社名は船山の発案）を開業した。貸本は、哲学書がむさぼり読まれた時代に、ニーチェ、ドストエフスキイ、キルケゴール等、手持ちの本を並べて繁盛した。孔版の方も椎名のかつての孔版仲間一人を加えて

注文に応じ切れないほどであった。しかし、出版は第一回船山馨著『稚情歌』、昭和二十一年一月一日発行、一万部制作して当時の日配（日本出版配給会社の略）が一部もとってくれなかった。第二回は椎名の友人井野貞一の戦争小説『軌の下』であった。二万部制作したが、これもGHQの検閲にかかり刷本のまま屑屋へ持ってゆかれた。奥付を見ると昭和二十一年六月三十日印刷、七月十五日発行となっている。印刷所は新潟県中蒲原郡新津村である。つまりこの事業は、借金を残したのみで倒産したのである。船山馨・春子（夫人）、春子夫人の甥や姪、椎名の弟実など参加協力した「創美社」の失敗後、借金返済のためにも小説を書く他はない。従って倒産直後の七月初旬、椎名夫人の母の里、富山県西砺波郡福光の近くにある大牧温泉（東砺波郡利賀村）へ船山と二人ででかけて行くのである。船山はその時のことを次のように書いている。

「敗戦後間もないころ、椎名君に誘われて富山県庄川峡の大牧という鄙びた温泉場で、十日あまり一緒にすごしたことがある。飯米持参でなければ、まだどこの宿屋でも泊めてくれなかったところで、私たちは砺波の山村にあった彼の奥さんの実家を訪ね、母堂から二人分の米をわけてもらって、それを背負っていった。そこでそれぞれ、作品をひとつ纏めて帰るつもりであった。宿はいかにも古びていたが構えは大きく、廊下を挟んで両側に鰻の寝床のようにならんだ間数も多かったが、客のほとんどは別棟の自炊客で、私たちの泊った本館は人の姿も疎らであった。」

（温泉宿の女）船山馨 昭46・5、新潮日本文学40『椎名麟三集』月報33）

ここで書かれた創作ノートが処女作「深夜の酒宴」の原形をなす「黒い運河」である。「黒い運河」創作ノートの表紙（B5判）左下には次のような年月日が記されている。

昭和二十一年七月十一日下筆

昭和二十一年七月二十一日脱稿

昭和二十一年七月二十四日浄書完了

これは、明らかに大牧温泉で書かれたものである。何故ならノート断片に湯治場の様子が書かれたものがあり、また船山のメモによれば、帰京したのが七月二十五日だからである。

「黒い運河」ノートには、二種類あって、一つは「私が（敗戦後）東京へ出て来て、あの本所の焼跡にある倉庫をつくりかへたアパートに住んでゐたときのことである」と始まる断片。「朝、僕は雨でも降ってゐるやうな音で眼が醒めるのだ。雨はたしかに大降りなのだ。それは屋根から流れ落ちて樋にあふれ、やがて大地の石の上に音高く落ちて行くのだ。その石に跳ねかへる水の連続音は単調にいつ果てるともなく続いてゐるのだ。——私はそのころを想ひ出すと、すぐいつの間にか雨の流れ落ちる音が耳の底に聞へてゐるのである。」と始まるノートがある。いずれも未完のまま書き変えられ、そして新たに独立した一冊のノートに「黒い運河」と題して完成したと考えられるのである。この完成ノートをもとにして原稿化した小説「黒い運河」は四〇〇字で八七枚（文華三七号10×20使用）にわたるが、表紙は次のようになっている。

たそがれの手記と改題改作す。

黒　　い　　運　　河
椎　　名　　麟　　三

昭和二十一年七月二十四日脱稿

つまり、脱稿年月日は、完成されたノートの表紙にある浄書完了年月日と一致し、現存する「黒い運河」を二十四

日に完成して帰京したのである。ただし原稿には「たそがれの手記と改題改作す」とあるので帰京後、改稿を予定していたことがわかる。船山馨が筆者に語ったところによれば、そのころ船山の小説「落日の手記」（昭22・7月号「人間」に発表）の原稿を椎名に見てもらったことがあって、余りにも題名が似ているため「たそがれの手記」は止めたのではないかと言われる。いずれにしても帰京後、「深夜の酒宴」と改題改作されて完成し、あちこちの出版社へ持ち歩くことになるのである。

「むろん私も、多くの作家たちと同じように雑誌社へ作品を持ち込んだ。そしてすべてから拒否された。私は数種のこれはと思う雑誌を買ひ込んで来て、一体どの雑誌が私を理解してくれるだろうか、調べて見たのである。そしてここならばと思ったのが『展望』である。その巻頭には、田辺元さんの実存的論文がのっていたからなのだ。昭和二十一年のあらゆる既成權威の崩壊し、人々の生きる根拠を失った、いわば実存的な状況において、田辺さんはそのなから私たちに語りかけておられたのである。つまりこんな論文をのせるような雑誌ならばと思ったのだ。何故なら私も、あのキルケゴールの主体性こそ真理であるという実存的な考えのなかに生きていたからである。夏の暑い日だった。私は、原稿をもってその雑誌を出している筑摩書房をたずねた。だがそのたずねあてた住所には、筑摩書房はなかったのだ。つまり東大の正門前へ移転していたのである。腹をへらしくたびれ果てていた私は、ふたたびそこへ行つてさがす氣力を失っていた。私は家へ戻った。そして郵送した。」（『重き流れのなかに』のころ）
昭42・1月号「群像」傍点筆者

こうして「展望」編集長臼井吉見の所へ届いた原稿は「半年以上」（冬樹社版『椎名麟三全集』月報Ⅰ、昭45・6、「回想」〈連載第二回〉椎名麟三）机の中に埋れていた。その理由については臼井吉見が「当時は用紙の統制で、雑誌は六十四ページと締められていたので、創作欄は毎号一編だけとし、そのかわりたっぷりページを割いて、力作を発表してもらう方針だった。そんなわけで年内はもちろん、さきさきの予定が立っていて、投稿をのせる余地はなかった」（「

昭39・10・26、「朝日新聞」、「作家と作品」(13)「臼井吉見」と書いている。なかなか発表されないので椎名は「切迫した思い」(同前)をこめて臼井宛手紙を書いた。「切迫した思い」の中には、新人の極めて個人的なあせりと同時に、ちょうどそのころ「読売新聞の海外消息欄で、五、六行の短いサルトルの紹介記事がのった。それを読むと、どうやら私の立場と似ているようなのである。私は腹を立てて、編集長であった臼井吉見氏へ失礼な手紙を書いた」(「わが心の自叙伝」へ作家となるころ、昭42・11・26、「神戸新聞」という事情もあったのである。折り返し臼井から採用決定の電報が来た。編集会議で相当反対意見があったにもかかわらず臼井が掲載決定に踏み切ったのである。椎名は喜んでその電報を、当時錦糸町駅前で飲食店を出していた妻に見せに行った。

このようにして処女作「深夜の酒宴」は、翌二十二年二月号の「展望」に「人間的自由の限界」梅本克己、「予言の論理」矢内原伊作、「最上川歌仙」柳田国男、「中野重治覚え書」臼井吉見、「『ゼエレン・キエルケゴール』新版序」和辻哲郎、「或る贖罪記念碑について」渡辺一夫、「フランス・ベーコン」樺俊雄らの論文と共に、小説としてはただ一編だけ発表されたのであった。

初出誌「編輯後記」には、次のように記されていることに触れておきたい。

「椎名麟三氏の小説『深夜の酒宴』についての世評はおそらくさまであらうが、作者は敢然とこの野心的な道を進むべきであらうし、進むであらうことを期待するものである。ただ一言したいのは、これはかのサルトルなどが喋々されるより以前の制作であるから読者が妙な早合点をされないやうに願ひたい。」

と臼井吉見の手によって書かれたのである。これは一般読書人には奇妙な感じを与えた。何故ならサルトルは一部の仏文学者を除いて、一般的には「水いらす」(昭21・10、「世界文学」吉村道夫訳)によって肉体派の作家として受けとられていたからである。

註

(1) 昭和十七年暮れから十八年にかけて椎名は富山房版『ハイデッガーの哲学』（アイロス・フィッシャー著、佐藤慶二訳）を読み、さらにハイデッガーの『存在と時間』（下巻）をノートをしつつ読んでいる。

(2) 富山県西砺波郡福光

(3) 「深夜の酒宴」が脱稿したとき、私は当時『人間』の編集長だった木村徳三氏に見てもらうようにすすめ、一緒に原稿を持って鎌倉文庫を訪ねた。木村氏も一読して作品の非凡なことを認め、掲載を約束してくれたが、ただ敗戦直後の薄い雑誌のスペースと睨みあわせて、四十枚ほど縮めてほしいということであった。椎名君は町重に、しかしはつきりと断った。「明日も夜から」船山馨 昭44・9月号「別冊文芸春秋」。また雑誌「群像」へ持ち込んだことを、椎名は昭和三十六年一月三十日のインタビュー「生い立ちと文学」（現代日本文学講座小説・7）で語っている。

(4) 冬樹社版全集月報1「昭和二二、三年ころ」椎名麟三

(5) 『展望』からは、ながいことなんの返事もなかった。そのうちに、サルトルの「水いらず」が実存主義の作品として紹介され、たちまちのうちに、実存という言葉が新しい文学の代名詞のような観を呈しはじめた。それは椎名君が存在という言葉で把握していた理念であった。（「明日も夜から」船山馨 44・9月号「別冊文芸春秋」、あるいは臼井吉見は「当時すでにサルトルの『水いらず』の翻訳が出ていたが、織田作之助などくらべられたりして『肉体文学』の一種のように見られていた。」（昭39・10・26、「朝日新聞」「作家と作品」〈13〉）と書いている。

二、「黒い運河」と「深夜の酒宴」

完成された「黒い運河」ノートの外に断片的ノートが残されているが、書き出しのみを見ても二種類ある。

①「私が（終戦後）東京へ出て来て、あの本所の焼跡にある倉庫をつくりかへたアパートに住んでゐたときのことである。朝、私は雨でも降つてゐるやうな音で眼が覚めるのだつた。雨はたしかに大降りだつた。それは屋根からすべり落ちて樋にあふれ、やがて大地の石に音高く落ちて行くのだつた。その連続音はいつになつて果てると思はれなかつた。傘を持たない私はどんなに憂鬱だつたであらう。しかも私は毎日図書館へ出かけなければならぬのだつた。」（一）内は不鮮明で筆者が補足した」

②「朝、僕は雨でも降つてゐるやうな音で眼が醒めるのだ。雨はたしかに大降りなのだ。それは屋根から流れ落ちて樋にあふれ、やがて大地の石の上に音高く落ちて行くのだ。その石に跳ねかへる水の連続音は単調にいつ果てるともなく続いてゐるのだ。——私はそのころを想ひ出すと、すぐいつの間にか雨の流れ落ちる音が耳の底に聞へてゐるのである。」

①は「私」という作家を夢みる語り手が、思い出として語る形をとっている。②は「深夜の酒宴」に近い「僕」でいきなり始められるが、「私」という語り手を付加している。そしてわずか一枚半で中止しているのである。しかし、書き出しの部分は二種類であるが、書き替えたノートは四種類あつて、①がノート七頁分、②が一・五頁分、他途中から六頁分「黒木（のちに白木）が加代の三人めの男として多く描かれる」残されている。もう一つのノートは途中から同じく六頁分で仙三と須巻、仙三と加代の関係が描かれている断片である。

次に完成されたノート「黒い運河」の書き出しは、次のようになっている。

③黒い運河（第一部）

「朝、須巻は雨でも降つてゐるやうな音で眼が覚めるのだつた。雨はたしかに大降りだつた。それは屋根から流れ落ちて樋にあふれ、やがて大地の上に音高く落ちて行くのだつた。その石に跳ねかへる水の連続音は単調にいつ果てるともなく続いてゐるのだつた。傘を持たない須巻はどんなに憂鬱だつたであらう。彼はどうしても朝外

食々堂へ行かなければならなかつたからである。」

そして「黒い運河」の完成原稿が書かれる。この時、右の部分についてのみ言えば、「大地」が「地面」となり、「音高く」が「音をたてて」、「石に跳ねかへる水の連続音」が「石に跳ねかへる、あるときは高くあるときは低い連続音はいつ果てる」と変更されている。そして最後は「彼は食事をこのアパートからかなり離れてゐる外食々堂でとらなければならなかつたのである。」と改められた。こうして大牧温泉で完成された原稿をもとに、東京でいよいよ「深夜の酒宴」として改題改稿されたのであった。

④深夜の酒宴（昭22：2、「展望」）

「朝、僕は雨でも降つてゐるやうな音で眼が覚めるのだ。雨はたしかに大降りなのである。それは（スレートの）屋根から、（朝の鈍い光線を含みながら素早く）樋へすべり落ち、（そして樋の破れた端から滝となつて）大地の石の上に音高く跳ねかへつて（沫をあげてゐるやうに感じられる）。しかもその水の単調な連続音はいつ果てるともなく続いてゐるのだ。（ただこの雨だれの音にはどこか空虚なところがある。僕が三十年間経験し親しんで来た雨だれの音には、微妙な軽やかな限りない変化があり、それがかへつて重い実質的なものを感じさせるのだが、この雨だれの音はただ単調で暗いのだ。それはそれが当然なのであって、この雨だれの音は、このアパートの炊事場から流れ出した下水が運河の石崖へ跳ねかへりながら落ちて行く音なのだ。）」（内は「黒い運河」にない描写）

このように断片ノートを含めて少なくとも四回、書き出し部分を正確に現存資料で見れば五回改稿されて完成されたということである。作家に近い語り手の「私」と主人公（三人称）①の手法、語り手「私」と主人公（二人称）「僕」で進められる②の手法、主人公（三人称）「須巻」で進められる③の手法、そして最後に④「深夜の酒宴」は主人公（一人称）「僕」で通してしまふことで完成するという変遷をたどっている。その間、細かに見れば、例えば黒木が白木